広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	日本語、韓国語に見られる擬音語・擬態語の対照研究
Author(s)	金, 素姫
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集 , 18期 : 67 - 90
Issue Date	2004-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00038858
Right	
Relation	

日本語、韓国語に見られる擬音語・擬態語の対照研究

金　素姫

Ⅰ．前書き

日本に来て、言葉に関して一番苦労したことが擬音語・擬態語だった。がりがり、もちもち、ぶくぶくなど、簡単な言葉でも分からなくて落ち込んだりしたが、だからこそ勉強してみようと思って始めたことがもう一年近くになった。

時間が経つに連れて日本語の中で最も重要なところは擬音語・擬態語ではないかと思いながらほぼ一年間におよんだことをまとめることにしよう。

Ⅱ．擬声語・擬態語とは？

まず、両国の辞書での定義を見ることにする。

1. 日本語

＊擬音語

・研究国語大辞典：物の音や動物の音などを真似て表した語。

・広辞苑：物の音響、音声などを真似て作った語。

＊擬態語

・事物の状態、様子を、それを表すのにふさわしい音で表した語。

・事物の姿態を感覚的に写し表す語。

・音を立てないものを音によって象徴的に表す言葉。

2. 韓国語。

＊擬音語

・大国語辞典、標準国語辞典：物の音を真似て表した音。擬音。

・教育大辞典：人の声を真似て表す言葉、或いは、その音。子供がまだ語彙が足りない時、言語発達の一段階として表す現状で、大人の場合はわざわざ使うことがある。

＊擬態語

・ある模様、状態などをそれと似ているように真似た言葉。

韓国ではこうした擬音語・擬態語という単語があるのにも関わらず、多くの韓国語学者

は「音声象徴」或いは「象徴語」と名付けている。その理由は、擬音語と擬態語は一つだけの意味を表すことはほとんどなく、いくつかの意味を持っていて、それが擬音語であれば、擬態語であったり、或いは両方の意味を持っているものもあるため、“『概念(signifie)』に『ある程度の必然的な』関係を持つ聴覚または、視覚的な映像を音素記号(significant)で『写す』こと、これらの意味を全て含んでいる「象徴語」で通っている。

音声象徴とは、言語記号の一部がその音声と意味との関係がより直接的に結合していて必然性が感じられることがあるが、こうした言語表現を音声象徴と言い、音声象徴に基づいた言葉を‘音声象徴語’または、‘象徴語’と言う。

ところが、「象徴語」という名称は擬音語・擬態語だけではなく形容詞、特に色の表現に対してもよく用いられるので本論では混乱をさけるため特徴がよく現れているので、私は擬音語・擬態語と表記することにする。

言葉が時代と共に変わったり、無くなったりしていくのにも拘わらず、韓国の擬音語・擬態語は固有語としてまだまだ数多く残っていて、繊細な感情表現に豊かに使われている。

III．研究の対象

日本と韓国で一緒に出版された本の中で一冊を選んだ。日本で出版されている THE JAPAN TIMES の「英語人と日本語人のための日本語擬態語辞典、1989」という本が、韓国では YOUNGYUNG MIDEA から「擬態語辞典、2000」という名で出版されていて言葉を比較するのに大変役に立つと思ったので、この本を中心にすることにした。

IV．両国の擬音後・擬態語の特徴

1.音韻的特徴

日本と韓国の擬音語・擬態語は母音と子音との結びつくことによって音感が変わる。

古代日本語（奈良ー平安時代）においては母音が８つあったが、三つの母音が、それぞれ似ている母音に合流して、平安時代以降五つになった。８つもあった時は、韓国語のように母音交替と母音調和も多分あったと思うが、五つになってから、母音の強弱や、母音による豊かな表現ができなくなったと思う。

韓国語の場合、中世の８つだった単純母音が今は七つで、複合母音が 18 個もあるので母音の交替による語感の表現が豊かである。また、日本語は母音と子音がそれぞれ結合することによって語感の違いを表現することができる。その特徴を見てみる。

まず、ある論文の結果を借りて音節の頻度数をみよう。この結果は、日本の小学校の教科書に出る 319 個の擬音語・擬態語を研究したものの結果である。

1)日本語の音韻的特徴

(1)日本語のオノマトペの語頭に来る音節の頻度の調査。

ア．カ行：21％

イ．サ行：19％

ウ．ア行：16％

エ．ハ行：13％

(2)日本語のオノマトペの語末に来る音節の頻度の調査

ア．り：18％

イ．促音：16%

ウ．撥音：14％

これは小学校の教科書に出る擬音語・擬態語の頻度数だが、擬音語・擬態語全体的にほぼ同じだと思う。

(3)音節の添加

ア．音韻による語感の違い；

ア)促音：一時的、瞬間的、素早い

意味を強くしたい、１回的、瞬間的な表現、急速度の進行、突然表われる変化、正確、鋭い、乾燥、さっぱりした感じがする。

イ)長音：時間的な長さを強調

音を伸ばす事によって、時間がかかる感じがする。

ウ)撥音：音の響きを表わす

強調、響き、余韻、軽い感じ、音の間に隙間がある。

エ)り：語末に来て回転と繰り返しを表わす

のろくて柔らかい、隙間が長いと感じる。

オ)ラ行：流動性

カ)ぱ行：破裂、破壊

韓国語のように、語頭に来る清音、濁音は語感と意味の変化に影響を及ぼす。

−清音([p][t][k][f][s])：小さい、少ない、快い、軽い、明るい、弱い

−濁音([b][d][g][v][z])：大きい、多い、不快、重い、暗い、強い

(4)母音による感じ

ア．[a]：口を大きく開いて発音する。−大きい、強い感じ

イ．[i]：甲高い音。明るい、小さい、早い

ウ．[o][u]：唇を尖らせたり、すぼめたり、両唇を閉じたり、近付けたりして、口の中に空洞ができる。その空洞自体が肥満を象徴。

エ．[o]：鈍くて不明瞭な音

オ．[e]：下品な表現が多く、一般的に否定的な意味

(5)一般の子音が持っている感じ

ア．[t][k]：硬い

イ．[s][z]：摩擦感

ウ．[m][n]：柔らかい感じ

エ．[h][p]：抵抗のない感じ。/b/と比べてより文章的で、上品な感じ。

オ．[r]：流動的、差し障りない感じ

カ．[r][l]：流動的ではないものもある。

2)韓国語の音韻的特徴

(1)母音交替（母音相対法則）：隠陽対立を通して語感が違う。

-陽性：明るい、軽い、小さい、鋭い

-隠性：暗い、重い、大きい、鈍い

	広い語感(前母音類)	狭い語感(後母音類)
小さい語感(低母音類) -陽性母音	[a][ae][ya][wa][wae] ・,・,・，・，・	[o][oe][yo] ・，・，・
大きい語感(高母音類) -陰性母音	[eo][e][yeo][wo][we][eu][eui][i] ・，・,・，・，・，・，・,・	[u][wi][yu] ・，・，・

＊小さい言葉／大きい言葉

−大きい言葉とは、語感が大きい言葉である。陰性母音同士の作り合った言葉で大きく感じられ、大きく聞こえる言葉である。

−小さい言葉というのは、大きい言葉と意味はほぼ同じで明るくて小さい感じの言葉である。擬音語・擬態語に多く、主に陽性母音で作り合っている。擬音語・擬態語のすべてが対になるというわけではないがほとんどがペアを組んでいる。同じ意味を表していても、小さい言葉を使うことによって印象がちがってくる。

(2)母音調和

韓国語では日本語と同様に、擬音後・擬態儀は前半部分とそれに類似したから後半部分になるが、それぞれに用いられる母音は普通陽性母音、あるいは陰性母音で一致しなければならない。これを「母音調和」という。中性母音の[i]が用いられる場合はその限りではない。日本語には[CuCu][CaCa][CoCo][CiCa][CoCu]などの形は多いが、韓国ではもっと複雑である。母音調和はアルタイ語の特徴でトルコ語、フィンランド語などでも見ることができる。。原住民の言葉と渡来人による古代韓国語とが入り混じった古代日本語の多くの語彙は原住民語と古代韓国語が混合されたので、古代日本語にも母音調和は存在したそうである。

(3)子音交替：平音、硬音([kk][bb][jj]…)、激音（＝帯気音[k][t][ch][p]…）の違いによって語感が変わる。

−後者になる事につれて語感が強くなる。(子音加勢法則)

普通の語感　(平音)	[g][d][b][s][j][ng] − [・・・・・・・・]
強い語感　　(硬音)	[gg][dd][bb][ss][jj][ll] − [・・・・・・・・]
激しい語感　(激音)	[k][t][p][ch][h] − [・・・・・]

＊子音加勢法則（語感の強度）

(4)末音の子音の役割

ア．内派音([g][b][s]・,・,・)：停止、あるいは差し迫って急な様、一時的な現象、軽い、乾燥、弾力のない感じ

イ．鼻音：([n][m][ng]・,・,・)：響く性質(共鳴)、弾力性と持続性、湿潤、軽さ

ウ．流音([l/r]・)：進行、流動、変転、湿潤、持続性

−日本語の場合：ら、り、る、れ、ろ の流音は動き（流動）の意味

ぱ、ぴ、ぷ、ぺ、ぽ の破裂音は破裂、破壊の意味

日本語と韓国語を勉強するに最も重要なところが、語感だと思われる。特に擬音語・擬態語は、言葉の意味よりまず伝わってくる感じで意味を把握しようとする言葉で、言わば、覚える単語ではなく、まず感じる言葉である。ところが、外国人は、母語の影響が強いため、日本語と韓国語の擬音語・擬態語を勉強するのに大変苦労すると思う。だからこそ、両国の擬音語・擬態語を勉強するには、音韻的特徴を身に付ける必要があると思う。

2．形態的特徴

＊基本形の設定

韓国語の場合、基本形がはっきりとしていて、基本形を繰り返したり、接尾語により派生もする。例えば、[mikkeun-mikkeun[・・−・・]-ぬるぬる]の場合、[mikkeun]という AB の基本形を繰り返したり、[-hada], [-georida], [-daeda]などを付加して派生する。基本形は、派生していない平音で陰性の単語を基本とする。ところが、日本語の場合は基本形を決めることが難しい。これは、その擬音語・擬態語の語根がどこにあるのかが不明瞭であるためだと思われる。

漢字から来たものや、動詞、形容詞などすでにある言葉から来たものは、簡単に基本形を決めることができると思う。形態的特徴は韓国の方から書くことにする。

１)韓国語の形態的特徴

・一つの意素単一形の擬音語・擬態語と二つ以上の核語が繰り返す重畳形擬音語・擬態語にわける。

・重畳形の擬音語・擬態語は、母音、あるいは子音が変わっても意味の変化はない。これは、必須の条件ではない。象懲形態素だけで組まれているもの、一般語の語幹、または誤根に音声象徴的要素が接尾して派生したものなどがある。

(1)重畳の様相

ア．完全畳語：独立性を持っている語幹が繰り返えされる。

ア)同音畳語：音声象徴のきっかけによって作られるため、分析できない単純な同一音の重畳形態。

イ)類音畳語：似ている形の二つの語根が繰り返す。繰り返す構造成分の一部が交替することで、基本形からの子音の添加と脱落、音節の交替が生ずる。類音畳語は、それぞれ同じ音節形式を持っているものの結合で、各要素の後半部は一致する。これを使うことによってある動作、状態について多様で変化感が感じられる。両方の形は、意味的な由縁性の有無とは関係なく、音相の対立に重点を置く。

–その音相を巧妙に変えることによって、同じ部類なのに、違う意味を持つことになる。子音、母音、音節だけを最小限に変えて、音相と意味に最も大きな対立をもたらすような構造にする。

重畳の変わったもののように見えるが、実際には独立的語根の合成によったものである。

イ．部分畳語：一つの語根の一部がくりかえす。

ア)語頭畳語：語根の前の部分（CV か CVC）がさらに添加する。

イ)語中畳語：語根内部の部分音が重畳。語根内部に CV が挿入して繰り返す。

ウ)語末畳語：語根の末のところがさらに添加、繰り返す。

ウ．類似畳語

外見では子音交替か音節交替による重畳に見えるもので、ある意味で、重畳語と認めない学者もいる。ところが、韓国で使われることでは、一般の単語としてより、擬音語・擬態語として認識していると思うので、擬音後・擬態語の範囲に入れたいと思う。

(2)形態構造分析

ア．完全畳語：一つの語根全体が同じ形で繰り返した言葉。

ア)音韻的、形態的変化過程が全然になく、完全に繰り返した場合。

イ)完全畳語の後、ある変化があった場合。

–類音畳語の場合、形態上相違に重点を置く場合は音韻、音節の交替が行われたと思われるが、形態的以外内部の構造の相違に重点を置くと’交替’ではなくて、音韻の’脱落’か’添加’だと見ることができる。

<table>
<tr><th></th><th></th><th colspan="2">例</th><th>派生方法</th><th>特徴</th></tr>
<tr><td rowspan="5">完全重畳</td><td rowspan="5">一つの基本形を繰り返すことによって作られるもの。</td><td colspan="2">[tnag-tnag][sak-sak][gadeuk-gadeuk]・・,・・,・・・・</td><td>前半要素を後半要素に写す。</td><td>自立的、派生する。完全重畳単一語。</td></tr>
<tr><td colspan="2">[kkul-kkul][maem-maem][peol-peol]・・,・・,・・</td><td></td><td>自律性ない。派生しない。</td></tr>
<tr><td colspan="2">[adeung-badeung][eombeong-deombeong][obul-kkobul][odong-podong]・・・・, ・・・・, ・・・・, ・・・・</td><td>後半要素の語頭子音を削除して前半要素写す。第一の CV(C)で C が脱落するか、第二の CV(C)で C1 が添加。</td><td>洗練された表現、現場描写に適切。
-[georida], [-・・・]
-[daeda], [-・・]
-[hada],[-・・],
-[ida][-・・]と自然に付けられる方が基本形。</td></tr>
<tr><td>[aong-daong][alssong-dalssong][eoluk-deoluk]・・・・,・・・・,・・・・</td><td>子音添加</td><td rowspan="2">右に重畳。
子音添加、あるいは音節の交替。</td><td rowspan="2"></td></tr>
<tr><td>[sikkeul-beokkul][oksin-gaksin][heodung-jidung]・・・・,・・・・, ・・・・</td><td>音節交替</td></tr>
</table>

イ．完全畳語の有形分析

ア)基本語根が完全に写して同じ形態の重畳。

-写した方向が左から右。

完全畳語単一語	自立性がない、派生の有形が決まっている
完全畳語複合語	各々自立する

イ)写した方向が右から左

-語頭子音の脱落：完全重畳の変形。-‘脱落’現象。

第１或いは第２構造要素で最初の音節初声（最初の子音）が脱落。

-基本形での子音が添加するか脱落することによって語感が変わる。

；より繊細な表現、現場描写に適切である。

Ex)[adung-badung][・・・・], [eombeong-deombeong][・・・・],

[obul-kkobul][・・・・], [odong-podong][・・・・],

[otol-dotol][・・・・], [olmang-jolmang][・・・・],

[ulgeut-bulgeut][・・・・]…

-[-hada], [-georida], [-daeda], [-ida]が付いて、派生する。

-派生ができる方が基本形である。

ウ)写す方向が左から右：一定の類型や規則はまだ明らかではないので決められてない状態である。

-子音が添加する場合：基本形での第１構成要素の初音節の子音が脱落するか、第２構造要素の初音節に子音が添加。「子音添加」、「子音脱落」というのは、韓国語では最初に来る「・(ieung -・・)」は子音として認められず、空いているところを埋めるために書いておくもので、子音の添加ができることである。

Ex)[aung-daung][・・・・], [omok-jomok][・・・・], [eoluk-deoluk][・・・・]…

-音節交替：基本形の初音節が繰り返して、後の初音節では他の音節に変わる。

Ex)[sikkeul-beokkeul][・・・・], [heodung-jidung][・・・・],

[oksin-gaksin][・・・・]…

-第１構成要素の[sikkeul][・・]が基本形で、[sikkeul-sikkeul][・・・・]はあるが、[beokkeul-beokkeul][・・・・]はない。第２構造要素の発音節が変わったものである。

イ．部分畳語：一部だけ繰り返す。語根が指示する音、動作、状態などが維持、持続する。

ア)語頭畳語：多くない。右から左へ写すが、その範囲によって違う表現形になる。語根の音節の構造によって変わる。

Ex)[daegul][・・]-[daekdaegul][・・・・],

[daegul][・・]-[daekdaegul][・・・]…

イ)語中畳語：２番目の音節の子音と母音が右に写したもの。

韓国語の語中畳語についてはまだ議論が多い。単語によって 3 音節のものが 2 音節になったという意見もあるが、擬音語、擬態語の場合は単音節から多音節に変わっていきながら音韻の挿入と重畳が行われるので、語中畳語が認められるべきである。

Ex)[sarararak][・・・・]-[sararak][・・・]-[sarak][・・]

		派生方法	音節構造	特徴	例
部分重畳	語頭畳語	右の方向に写す 語基の構造によって違う	CV+CVC -CVC+CV+CVC	最初CVと次の音節のCが語頭になる。	[daegul]-[daekdaegul]
			CVC+CVC -CV+CVC+CVC	最初のCVが語頭になる。	[dungsil]-[dudungsil]
			CV+CVC-CVC+CVC+CVC CVC+CV+CVC-CVC+CVC+CV+CVC	最初のCVCの中で子音か母音を一つ取ったもの。	[deongsil]-[dungdeongsil] [daenggeurang]-[waengdanggurang]
	語中重畳	必ず二番目の音節のCVを右に写す。	CV+CVC -CV+CV+CVC	全てCV+CV+CVCの音節構造。 中のCVは何度も増やすことができる。	[padak]-[padadak]
	語末畳語	最後の音節を添加、重畳	CVC+CVC-CVC+CVC+CVC	最後の音節を繰り返す。	[kungdeok]-[kungdeokdeok]
		[r/l]音韻の重畳	CVC+CVC-CVC+CV+CV+CV	最後の音節の[r/l]に母音[eu/・]を添加さらに繰り返す。	[binggeul]-[binggeururu]

ウ)語末畳語

(ア)最後の音節を語末に添加する。Ex)[kungdeok][・・]-[kungdeokdeok][・・・]

(イ)[pareureu][・・・], [sareureu][・・・], [ureureu][・・・]などは、語根の語末子音がない(C)Vの構造もので、語根の最後の音節を繰り返したものである。こういう形も語末畳語に含まれる。

(ウ)最後の音節のC(r/l-・)にV(初声母音‘[eu] -・ ’)を添加して繰り返したもの。

Ex)[daegul][・・]-[daegureureu][・・・・],

[wageul][・・]-[wageureureu][・・・・]

-このCVが添加したものは、各々の語根が指示する動作、状態の維持、持続することを意味する。

●部分畳語の特徴的な現象

-舌先で発音される、/r/の音韻が繰り返す傾向がある。特に、語中、語末でよく見られ

る。韓国語の場合、語頭の/r/の発音が難しいため、語頭/r/の重畳はないが、語中、語末では頻繁に見ることができる。これは、音調を滑らかにして聞き手に快さが伝えられる音便と同じ現象である。

ウ．類似畳語

–外見では子音交替か音節交替による重畳に見える。

				例	
類似畳語	重畳と似ているが、重畳ではない。	表面上、子音交替か音節交替。	独立の語根の結合。	[asakbasak]	自立する。派生する。
		表面的、母音交替。	右より左の方が低母音。	[siluksaeluk]	心理的且つ生理的に感じる。
		重畳形単一語。	基本形の区別がつかない。分けたら意味不明。	[osondoson]	一つの語根になったもの。

ア)独立の語根の結合–合成語形

–文章の中で自立し、[-geirida], [-daeda], [-ida], [-hada]などの派生語尾を添加することができる。

Ex)[asakbasak]-[・・・・]で[asak]-[・・]と[basak]-[・・]は各々存在する単語で両方ともお菓子や野菜などの噛み味や切れ味がいいことを表す日本語の「さくさく」と同じ意味のことである。両方とも[asak-asak]-[・・・・],[basak-basak]-[・・・・]とも使われる独立の言葉であってそれぞれが一つになったものである。

イ)表面的には母音交替

右のものと母音だけ違ったもので、母音が交替したものと見ることができる。右のものより左にあるものが低母音である。これによって心理的且つ生理的な現象と認識する。

Cf)　高母音：[i]・、[eu]　・、[u]・、低母音：[ae]　・、[a]・

ウ)繰り返した単一語

重畳か合成でもないし、どれが基本形かの区別が付かないもの、要するに一つの単語として認められるものがある。

Ex)[oson-doson]-[・・・・], [eogeun-beogeun]-[・・・・]

二つの構成要素の関係が不透明で、基本形が分からないものである。二つを別々に分け

たら意味が分からなくなり、派生も当然できないので、一つの語根として認められるものである。

(3)漢字

擬音語・擬態語を使う度に思うことは、漢字で書けるかどうかということである。日本語の場合かなりの数の擬音語・擬態語を辞書で調べると漢字が出てくる。これは韓国語とはもっとも違うことである。

韓国の擬音語・擬態語は韓国語固有の言葉であり、常にハングルで表記され、漢字で書かれることは全くない。漢字の擬音語・擬態語について論ずる理由は、日本語の擬音語・擬態語のうち、ある程度のものは普通使われる動詞や形容動詞、形容詞からその語根だけを取って繰り返したものが多いと思うからである。

私の資料としている、「英語人と日本語人のための日本語擬態語辞典」に載せてあるもののほぼ 20%がほとんどの場合仮名で表記されるとしても、書こうと思えば漢字で書くことができる。

・あの二人は**あつあつ**の仲だ。

・質問に**いちいち**答える。

ここでの「あつあつ」は「熱々」と、「いちいち」は「一々」と漢字で書ける。韓国語では[yeolyeol]と[hanahana/ilil]と発音するが、こういうことが、この本の 182 個の中の 36 個、つまり 20%にあてはまる。このようなタイプの言葉は韓国では擬音語・擬態語としては認めていない。その理由は、漢字をある程度分かっている人ならば発音は違っても意味は分かるもので、肌で感じられ、文化の中で自然に分かるものではないからである。というわけで、韓国では漢字で書ける言葉は擬音語・擬態語として扱わない。「ろうろう-朗々」、「きゅうきゅう-汲々／急々」など、言葉として使われているが「ヒットする」、「エスカレートする（-韓国はこの言葉はない)」などのような外来語と同じであるとみなされる。韓国も繰り返した漢字語を認めるなら擬音語・擬態語の数は増えるだろう。

さらに、36%(66/182)に至るものがある単語から来たものと見られる。

・「ひそひそ」-「密か」

・「もりもり」-「盛る」

このことから、日本の擬音語・擬態語は韓国語より、必然性が欠けているとも言える。「ぱくぱく」、「てくてく」、「とぼとぼ」のように、音や様子を描写したものだけを、擬音語・擬態語と認めたい。

2)日本語の形態的特徴

(1)畳語、促音、撥音、り音、長音、清音、濁音、半濁音、不規則な変化などがある。
ア．ABAB の形が一番多い。
イ．２拍以上の畳語：強調、緊張、連続、延長などが感じられる。
ウ．畳語：連続性の表現に使われて意味の強調、リズムを表わす。
ア)同音の繰り返し：滅多にない。
イ)異音の繰り返し：多い、ABAB,ABCABC
−韓国語は文字に初声、中声、終声があって、一つの字でも音声による象徴が表われるのに対して、日本語は一文字一音なのため、音声象徴はできない。

(2)音節の添加
ア．促音の添加：形式上、促音で終わるものには‘と’がつく。
撥音の直前、直後には付けない。
イ．り音の添加：促音、撥音の直後には付けない。
元々「り」音が入っているもの、或いは、語根にり音添加。
ウ．撥音：元々、基本形に撥音が入っているもの。
或いは、基本形から派生した一部に撥音添加。
エ．長音：擬声語はカタカナで、擬態語はひらがなで表記。

(3)日本語の擬音語・擬態語は、動詞と結び付いて複合動詞になる事が多い。
ア．２音節の擬態語「＋ーつく」の形が一般的。しかし、AB つくの形で、B の発音が撥音とか母音の場合“つく”は付けられないことが多い。
イ．韓国語とは違い：ゆっくり、はっきり、もっとなど、品詞の分類に違いがある。
普通、日本の擬音語・擬態語の形態的特徴はこのようにまとめられているが、これらは、擬音語・擬態語の形になった後に付くもので、韓国語のように擬音語・擬態語自体の様子は語っていない。私は、韓国語のように、擬音語・擬態語が単語になる間にもある変化があると思っていて、基本形とそこから派生した擬音語・擬態語を探したかったので、自分なりに考えてみた。
私は日本語も子音の交替と音節の交替が行われていると思う。これを決めるのに最も重要なことが基本形の設定だと思っている。日本語は、韓国とは違って、漢字から来た擬音語・擬態語も認めているのでその基本形を探すことはより易しいことである。
「あつあつ」の場合、「熱熱」もあり、「厚厚」もある。
＊二人は**あつあつ**の仲だ。
の場合は、「熱熱」で、この「あつあつ」は「熱」の漢字か「熱い」の形容詞から来たこと

が分かる。この場合の語根は「熱」になり、基本形もまた、「あつ」と言えないだろうか。

資料とした本では繰り返した擬音語・擬態語がすべてで、その中での比較は難しい。そこでひとつひとつの単語を、辞書を引きながら 182 個を探してみたところ、自分なりの結果を出すことができた。

これは上の擬音語・擬態語の特徴は除いたものである。

<table>
<tr><td></td><td colspan="3">形態</td></tr>
<tr><td rowspan="10">擬音語、擬態語</td><td rowspan="8">重畳形</td><td rowspan="7">完全重畳</td><td>同音畳語</td><td>いじいじ、じとじと
ぽたぽた、しぶしぶ、むかむか</td></tr>
<tr><td>子音添加か脱落</td><td>うずうず-むずむず</td></tr>
<tr><td>子音交替</td><td>「“」、「゜」が付いたもの。</td></tr>
<tr><td>音節交替</td><td>うじうじ-もじもじ、くよくよ-くやくや、
いらいら-いらくら、</td></tr>
<tr><td>語根に前に何かが付く</td><td>しゃあしゃあ-いけしゃあしゃあ
へらへら-えへらえへら</td></tr>
<tr><td>語根の後に何かが付く</td><td>ずきずき-ずきんずきん
だらだら-ふしだら
もじもじ-もじかわ</td></tr>
<tr><td>自立語から繰り返して後半要素に連濁がおこるもの</td><td>しみじみ(染み染み)
こわごわ(怖々)
さむざむ(寒々)</td></tr>
<tr><td>自立語の繰り返しで連濁がおきないもの</td><td>おずおず(怖ず怖ず)-おどおど
あつあつ</td></tr>
<tr><td colspan="2">類似重畳</td><td>表面的に子音交替か音節交替が二つの語根が一つか、逆になったもの</td><td>うねくね(うねる-うねうね/くねる-くねくね)
むさくさ(むさい-むさむさ/くさい-くさくさ)
めちゃくちゃ(めちゃめちゃ/くちゃくちゃ)</td></tr>
<tr><td colspan="2">単一語</td><td>独立的に使われるもの</td><td>し-ん、さっ、どんちゃん、ぺちゃんこ</td></tr>
</table>

3. 意味的特徴

１)複数の意味を持っているもの。

日本と韓国の擬音語・擬態語は一つだけの意味を持っているものもあるが、二つ以上の

意味を持っているものも多くある。

・箱が壊れてりんごが**ごろごろ**と転がってきた。

・遠くで雷が**ゴロゴロ**と鳴っている。

上の文章は基本的な用法で、何かが転がっている様子を表しているが、下の文章は雷の音を表している。このように、違う意味を同じ日本語で表していることも多いが、逆に韓国では同じ表現を用いるのに日本語では別々の表現を使う例もある。

[bandeulbadeul]

・**つやつや**とした髪の毛。

・彼は頭が**つるつる**にはげている。

この場合は、光沢があって美しい様子や表面が滑らかな状態を表すが、なまけ者、または、悪がしこいさまを表す時もよく使われる。

2)擬音語・擬態語で訳せないもの

品詞が違ったり、擬音語・擬態語として定着してなかったりして、両方がちゃんとした擬音語・擬態語ではなく、説明文になったり、省略までされるものがある。

日本語の場合、「ちらちら」、「どろどろ」、「でれでれ」など、説明文の中で副詞になったりすることがある。また、「むっ」、「ばたり」など、文章の中で説明文になって、ただ感じだけを伝えたりするものもある。このようなものは日本にも韓国にも多くあると思う。資料としている本でも 50/182 個の 27．4%にあてはまる。

3)人の行動、感情に関する物が多い

両国の擬音語・擬態語は何より人の行動や感情に関するものが多い。韓国には特に笑いに関する擬音語・擬態語が多い。

4)意味と、音韻的、形態的特徴との関係

両国の擬音語・擬態語は形によって言葉のニュアンス、語感が違うため、音韻的、形態的特徴が意味と深い関係があると思われる。反復、促音、撥音、長音「り」などの音節の添加、母音、子音との関係が分からないと、正しい意味やニュアンスが伝えられない恐れがある。

４．文法的特徴

日本語の擬音語・擬態語は「と、」「に」、「する」、或いは、特定の動詞を伴って使われている。その文法的機能をまとめてみた。

1)副詞的機能

(1)擬音語・擬態語(+と)+動詞

・勉強しながら**うとうと**と眠りはじめた。

・夏の太陽が**ぎらぎら**照りつけている。

・そんなに**じろじろ**と人の顔を見るのではない。

擬音語・擬態語のほとんどは「と」を共にしたり、或いはそのまま副詞として働く。同じ擬音語・擬態語でも「と」が付く場合もあれば、付かない場合もある。「と」を付けることによって、意味を強調したり、語調を生々しく伝えることができる。

(2)いつも「と」が付く場合

ある擬音語・擬態語はいつも「と」が付くものがある。その形態はこのようなものである。

ア．語尾が促音の場合

＊バッターは**さっ**と身をかわしてボールを避けた。

＊水が**どっ**と流れ込む。

促音で終わるものは必ず「と」を伴う。そうでないと発音が難しいし、何か足りないと感じる。

イ．２音節で語尾が撥音か長音の場合。

・夏休みに入って需要が**ぐん**と伸びた。

・指揮者が構えると客は**しん**と静まりかえった。

この場合は「と」がないと単なる言語音に止まる恐れがあるので必要となり、これは連用修飾の機能だけ持っている。但し、こういうものが重畳語になると必ずしも「と」は必須ではない。

ウ．２音節の語根+撥音の場合。

・客足がが**くん**と落ちる。

・起きたらふとんを**きちん**と畳みなさい。

これらも、発音が難しいため、「と」を伴うが、「どきん」のように随意的なものもある。

エ．３音節目が「り」で終わる場合。

・狙いを**ぴたり**と定める。

・言い間違えて**ぺろり**と舌を出す。

「り」で終わるもののほとんどは、「と」が付くが、随意的なものもある。

オ．２音節の語根の間に促音が入っている場合。

・もったいぶらずに**さっさ**と言えよ。

２音節の間に促音か撥音が入ったものは、それだけでは安定できず、不完全に感じるため「と」が要る。
カ．４モーラ以上の場合、比較的随意的だが、まざまざ、のうのうなどのように必ず、「と」が付くものもあるという。これは慣用的なもので「まんじりともしない」「びくともしない」のように、「…＋とーない」、「ぐらぐらとくる」、「かちんとくる」のように「…＋とくる」、「相手の攻撃に**たじたじ**となる」のように「…となる」などのように、使われるものである。

(3)「と」、「に」の両方が取れるもの。
一般の副詞では意味的な違いはないが、擬音語・擬態語では「と」と「に」の使い方が違う。「と」と「に」の両方が使えるものは、重畳形で擬音語と擬態語、両方の性質を持っているものである。「と」が付くと、音声の描写が、動作、進行などの経過状態を表す。
「に」の場合は、成立した後の状態を表す。
・**かんかん**になって怒る。
・炭が**かんかん**とおこる。

(4)「と」を伴わない場合
・久しぶりの雨で暑さも**ちょっぴり**お休みだ。
・声が父親に**そっくり**で、電話だとよく間違える。
このように、程度、数量副詞に近いものは、「と」は付けずに直接に時間、数量、程度を限定して動詞を修飾する。
＊会社は５年間に**ぐんぐん**成長した。
＊少しの間、**ぶらぶら**町を歩いた。
などのように、動詞選択に制限が強い場合、「と」は余分な物と感じられる。また、こういう擬音語・擬態語の大方は「する」が付いて述語として使われることもある。

2)形容動詞的機能
(1)「と」、「に」の両方が取れるもの。
副詞的機能と同じく使われている。

(2)「に」だけを伴うもの。
・**ぐでんぐでん**に酔っぱらう。
・**めちゃめちゃ**につぶれた。

・**ずたずた**に切る。
・**ほかほか**の御飯。
・このスカートは**ゆるゆる**だ。
　「に」が付くものは、ほとんど否定的表現が多い、「な」、「の」も随伴して名詞、代名詞の体言を修飾したり、「だ」、「で」が付くなど、形容動詞の性質を持っている。また、「に」だけが使われるものは、「擬音語・擬態語+になる」、「擬音語・擬態語+にする」の形であるものが多い。
・この本は背表紙が取れて**ばらばら**になりそうだ。
・並べたものが**ぐちゃぐちゃ**になる。
・時計を**ばらばら**にする。
・壇の上で**かちかち**になる。
「擬音語・擬態語+になる」の形は変化の結果を、「擬音語・擬態語+にする」の形は動作や意図を表すことがある。

(3)「の」だけを伴うもの。
・あの二人は**あつあつ**の仲だ。
　極めて少数のものは、「に」や「な」を伴わず、「の」だけで連体修飾する。これは形容動詞の一部の性質だけ持っていると言える。

(4)「ーしい」の形で形容詞になる。
・**けばけば**しくかざり立てる。

3)動詞的機能
　擬音語・擬態語に「する」、「つく」、「めく」などが付いて、動詞的機能を持つ。
　「めく」は、その様子に見えるよう、そう言う感じがするようになるという意味を、「つく」もその様子になりかかるという状態の変化があったことを表す。「めく」と「つく」はほとんどの擬音語・擬態語に付くが、ABAB の形に付くのではなく、韓国語の擬音語・擬態語のように、AB の状態に付く。
・だらだら：だらつく。
・ひそひそ：ひそめく。

次に「する」を中心に見てみる。

(1)いつも「する」を伴う。

・思うとおりにならなくて**いらいら**する。

・必要な出費なのに**けちけち**する。

・あまり**くよくよ**するな。

擬音語・擬態語に「する」が付いて、状態や性質、人間の心理状態、感情、行動などを表す。

・胸が**どきどき**して手紙を開けることもできなかった。

・**いじいじ**した態度。

・**ごわごわ**した浴衣。

・**おろおろ**して何も手に付かない。

このように、自動詞として使われているものが多く、状態を描写する特徴があるわけで、状態副詞と言われている。

(2)「する」を伴わないものの特徴

・２台の自動車が**すれすれ**行き違った。

のように、程度副詞に近いもの。

・赤ん坊が**すやすや**と寝ている。

のように、特定の動詞とのつながりが固いもの。

・子供が**すくすく**と育つ。

のように、動作、事物などが次々と動く様子を表すもの。

4)名詞化

両国の擬音語・擬態語は、文章や一般の会話の中で、一つの名詞として使われることも多い。その例をいくつかまとめてみる。

(1)幼児語として使われているもの。

・わんわん：犬

・ぶーぶー：車

・にゃーにゃー：猫

・ごろごろ：雷

(2)擬音語・擬態語から、意味が移り変わって名詞になったもの。

・**ごたごた**が絶えない。

−種々の物が雑然と入り混じって整理が悪いさまという意味から、もめていたり、突発的な出来事に取り組んでいたりするさまを意味して紛争の意味を持つ。

＊顔に**ぼつぼつ**ができた。

−小さな点や粒の散在するさま。また、その点や粒という意味から湿疹やニキビを表す。

(3)擬音語・擬態語の意味を持ちながら、名詞になったもの。

・ごろごろ−雷がとどろき渡る音の意味で、幼児語で雷を言う。

(4)擬音語・擬態語が他の品詞と結合したもの。

Ex)ごろ寝、びしょ濡れ、ほろ酔い、ずたずた斬り、ぞろっぺえ、金ぴか物などなど。

韓国の擬音語・擬態語は、接尾辞が付くことで名詞、形容詞、動詞になる。

1)名詞派生

擬音語・擬態語が名詞になる接尾辞は、[-bo], [soe], [jil], [gwari]などがなるが、代表的なものは[-i]であり、これが用いられることが一番多い。

Ex)[ttung-ttung]-[・・]-[ttungbo]-[・・],[allang-allang]-[・・・・]-[allngsoe]-[・・・], [ttalkkuk-ttalkkuk]-[・・・・]-[ttalkkukjil]-[・・・], [kkwaeng-kkwaeng]-[・・]-[kkwaenggwari]-[・・・]…

韓国の擬音語・擬態語	意味	名詞化	意味	日本の擬態語・擬態語
[maem-maem]-[・・]	せみの泣き声	[maemi]-[・・]	せみ	ミーンミーン
[kkakduk-kkakduk]-[・・・・]	立方体のように切った形	[kkakttugi]-[・・・]	カクテキ	
[gaegul-gaegul]-[・・・・]	蛙の泣き声	[gaeguri]-[・・・]	蛙	けろけろ
[gwittul-gwittul]-[・・・・]	コオロギの泣き声	[gwitturami]-[・・・・]	コオロギ	ころころ

2)形容詞派生

擬音語・擬態語に[-hada], [-eopda]が付いて形容詞になる。

(1)[-hada]

韓国の擬音語・擬態語	＋[hada]	意味	日本語の派生
[mikkeun-mikkeun] -[・・・・]	[mikkeun-mikkeun-hada] -[・・・・・・] [mikkeun-hada]-[・・・・]	つるつる ／ぬるぬる	つるつるとしたー
[geochil-geochil] -[・・・・]	[geochil-geochil-hada] -[・・・・・・] [geochil-hada]-[・・・・]	かさかさ ／がさがさ	かさかさのー がさがさしたー

ABAB の形で、ABAB に付いたり、AB だけにも付く。

(2)[-eopda]

ABAB の形で、AB に付く。B の CVC の中で、終声の C(1)が後の[eo]に影響を与え、[reo]になる。

韓国の擬音語・擬態語	＋[eopda]	意味
[budeul-budeul]-[・・・・]	[budeureopda]-[・・・・]	なめらか
[jinggeul-jinggeul]-[・・・・]	[jinggeureopda]-[・・・・]	不快な気持ちがする
[eojil-eojil]-[・・・・]	[eojireopda]-[・・・・]	くらくら

3)動詞派生

ABAB の形で、AB に[-ida]-[・・], [-georida]-[・・・], [-daeda]-[・・]が付いたり、ABAB に[-hada]-[・・]が付いて動詞なる。[-georida], [-daeda], [-ida]は 2 音節語根と繰り返した単音節の語根に付く傾向がある。これは、韓国語が、2 音節語が主になっている単音節言語に属するためである。また、擬音語・擬態語の全てに[-georida], [-daeda], [-ida]が付くとは限らない。

・[-georida]は同じ動作を繰り返すことを表す。

・[-daeda]は[-georida]が付ける副詞の語根に付いてその言葉を動詞に変える。

~(し) 続ける、~(し)たてる、 ~(し)こける ~(し)散らすという意味になる。

韓国の擬音語･擬態語	[-ida]-[・・]	[-georida]-[・・・] [-daeda]-[・・]	[-hada]-[・・]	意味
[gubul-gubul] -[・・・・]		[gubul-georida] [gubul-daeda]	[gubul-gubul-hada]	くねくね
[banjjak-banjjak] -[・・・・]	[banjjak-ida]	[banjjak-georida]	[banjjak-banjjak-hada]	ぴかぴか
[huljjeok-huljjeok] -[・・・・]	[huljjeok-ida]	[huljjeok-georida] [huljjeok-daeda]	[huljjeok-hujjeok-hada]	しくしく

Ⅶ. 結論

韓国語の擬音語・擬態語をより簡単に見分ける方法は、「象徴素」をまず見つけることである。100%とは言えないがほとんどの擬音語・擬態語にこの象徴素が付いているので、すぐ分かる。その種類は 20 個から 22 個までと学者によって分類の仕方は違うが、全く違うのではなく､重畳の際変わる母音や子音の分類方法によるものでここでは 20 個を紹介する。子音の加勢（濃音化、激音化）と母音の陽陰性は分けない。

-・:-・,・[-geun]	-・[-geul]	-・:-・,-・[-geum]	-・:-・[-geut]
-・:-・,-・,-・,-・,-・,-・,-・,-・,-・[-dak]	-・:-・,-・,-・,-・,-・[-dong]	-・:-・[-deuk]	-・[-deuk]
-・:-・(-・,-・)[-lak/ak]	-・:-・[-lang]	-・:-・[-lok]	-・:-・[-mak]
-・[-mul]	-・:-・,-・,-・[-bak]	-・:-・,-・,-・[-sak]	-・[-seul]
-・[-sil]	-・:-・,-・,-・,-・,-・[-jak]	-・:-・,-・,-・,-・[-jok]	-・[-jil]

残念ながら、他のものから、象徴素を区別する明確な規則は存在しない。これは、韓国人でないと感じられないことで、韓国語を学ぶ外国人にとっては最も難しいところである。同じように、外国人にとって日本の擬音語・擬態語も簡単に感じて分かるというわけには

いかない。

日本と韓国の擬音語・擬態語は、派生、音節の交替、子音の交替などが行われていて、語感に関しても一致する部分もある。これは、近い国であって、お互いの感じることが似ているからではないかと思われる。また逆に、全く違っていて韓国人の感覚では分からないこともあったが、それを分かるように努力することこそ外国語を勉強することだと思う。

両国の擬音語・擬態語の共通的特徴は、ABAB の 4 音節が多いことと、音節添加、派生が行われることである。私はそれに、日本語にも促音、撥音、「り」の添加だけではなく、それ以外の音節交替と子音交替があると思う。似ている言葉を全部集めたら、語根の前や後にある言葉が付いて強調したり、ニュアンスを変えることができたりして、これ以上の特徴がを見出すことができると思う。

日本語が韓国語と最も違うところは漢字語を擬音語・擬態語として認めていることである。韓国では、固有のハングルで作られた言葉だけを擬音語・擬態語として認めて、漢字から来た言葉は認めない。「事物の状態、様子を、それを表すのにふさわしい音で表した語、物の音響、音声などを真似て作った語」という定義からは、漢字の言葉は擬音語・擬態語とは認められず、「ざあざあ」、「あっぷあっぷ」、「がぶがぶ」、「しくしく」、「じゃぶじゃぶ」のような、人の動きや物の音をできるかぎり音にしようとしたものだけが擬音語・擬態語として認められるべきである。

両言語にはの擬音語・擬態語が多くて比較しやすいだろうとも思ったが、違っていた。似ているものは確かに多いと言えるが、よく考えたら、重さ、早さ、大きさ、連続性など、言葉のニュアンスが微妙に違って、よく考えたら「これだ」とはっきり言えることが思ったより少なくなるかも知れない。

擬音語・擬態語は人、時代、社会に従って急速に変化していく言葉なので研究するに大変苦労すると思うが、国の言葉と文化を感じるには相当役に立つと思う。

また、擬音語・擬態語を教えて、教わる時には、自分の母語の感覚ではなく日本や韓国、相手の言葉だということを念頭に置いて勉強するべきだと思う。

固有の文化から生み出された擬音語・擬態語も多くあると思う。それに関しても元々考えていたことろまで研究が至らなかったことを残念に思う。

参考資料

Son Young Hee、2002、「日本語擬音語、擬態語の韓国語翻訳に関しての考察-「雪国」を中心に」、DANGUK 大学

カツタサトシ、2001、「韓国語擬声語、擬態語の教育研究-日本語を母語とした韓国語の学

習者を中心に」、GYOUNGHEE 大学
Lee Soo Youn、2000、「日本語オノマトペに関する考察-日本の小学校の国語教科書鵜を中心に」、HANNAM 大学
Chae Wan、2000、「韓国語の擬音語、擬態語研究の幾つかの問題」、同徳女大学
Min Ji Young、2001、「示差的特徴を利用した、擬音語、擬態語の意味分析」、名古屋大学院、日本語文学 10
Lee Sang Gyoo、1994、「韓国語の擬声擬態語の研究」、HANYANG 大学
Kim Hong Beom、1998、「韓国語の象徴語の研究-通史的特徴を中心に」、HANNAM 大学
Heo In Seon、1989、「現代日本語の、象徴語に関する考察-児童マンガを中心に」、全北大学
Jin Joo、2000、「韓国語象徴語の形態、意味構造研究」, 忠北大学・教育大学院
擬音語・擬態語の研究の流れ、http://www.hangeul.pe.kr/symbol/history.htm
沢田信恵、1988、「日本語・韓国語における擬音語(擬声語・擬態語)の音韻的比較、同徳女大学
新井理恵、2001、「日本語の擬態語に関する一考察-人の動作に関する表現を中心に-」、韓国外国語大学
青内鳥文子、2000、「様態副詞に関する一考察」、韓国外国語大学
青山秀雄、「朝鮮語の擬音語・擬態語」、天理大学
カケヒ　ヒサオ、「英語の擬音語・擬態語」、神戸大学
Lee gi mun 監守、1999、「韓国語辞典」、Doosan DongA
阿久津　智、1995、「絵で慣らす擬音語擬態語」、(株) DaRakWon
日向茂男　外、1993、「オノマトペ」擬音語、擬態語の活力を解明する」、月刊言語、1993, Vol.22, No.6
大坪併治、1989、「擬声語の研究」、明治書院
広辞苑-第五版、岩波書店
田守育啓、1999、ローレンス・スコウラップ「オノマトペ-形態と意味」柴谷方良・西光義弘・影山太郎編集　日英語対照研究シリーズ(6)、くろしお出版
田守育啓、2002、＜もっと知りたい！日本語＞オノマトペ擬音・擬態語を楽しむ、岩波書店
橋本敬司、1995、「オノマトペの前哨」、広島大学留学センター紀要　第 6 号